

B. ポッターとウェップ夫妻

藤 井 透

〔抄 録〕

本稿は、ウェップ夫妻の労働組合主義研究の頂点である1897年の『産業民主主義』の論理に、独身時代のビアトリスの研究と調査が、いかに大きな影響を与えていたかを論じた。

ビアトリスは、1880年代に師弟関係にあったハーバート・スペンサーのつよい影響を受け、かれの研究から学んだ、「能力」、「欲求」のキーワードを使った「能力と欲求の経済学」を自分の経済学に据えた。「能力と欲求の経済学」はその後、1891年のビアトリスの『イギリスの協同組合運動』にも引き継がれ、『産業民主主義』では、コモン・ルールおよびナショナル・ミニマムを導出する決定的な方法的視点となった。また、ビアトリスはC. ブースの「ロンドン調査」に参加する以前に、コンベンショナル・ミニマム概念の萌芽的理解を得ていたことも明らかにした。

キーワード：ウェップ夫妻、ハーバート・スペンサー、産業民主主義、ビアトリス・ポッター、コンベンショナル・ミニマム

はじめに

「Q14 あなたは、パートナーシップに対するウェップ夫妻の貢献を、それぞれ分けて、価値を見出せるとお思いですか？もし、あるとしたら、それらはどの部分でしょうか？A. いいえ、それはないと思います。それはかれらの完璧な合作（a perfect collaboration）でした。しかし、ビアトリスの日記が刊行されるまでは、だれも答えられないでしょう」⁽¹⁾。

これは、1949年に刊行された『ウェップ夫妻とかれらの業績』の第一章「初期の時代」のなかで、M. コールが書面で、長年の夫妻の友人であったG. バーナード・ショーンに質問をした15の質問のなかの14番目の質問と回答である⁽²⁾。周知のように、1943年にビアトリス、1947年にはシドニーが亡くなり、半世紀以上にわたって、イギリス社会主義の理論と運動に大きな影響を与えたウェップ夫妻の活動は終止符を打った。うへの著作は、ウェップ夫妻の死を偲んで多くの関係者によってテーマごとに執筆された論文集であり、かれらに対する同時代的な評

価がよく表れている。

ショーの回答にあった、ビアトリスの「日記」とは、1948年に同じM. コールらの編集によって刊行されていた『われわれのパートナーシップ』を指すのか、あるいは、1980年代にマッケンジー夫妻の手によって刊行された4巻本の『ビアトリス・ウェップの日記』を指すかは、今となっては、特定できない⁽³⁾。もし徹底的に追求しようと思えば、LSE 附属図書館に所蔵されている彼女の日記の原資料を調査し、読破することが求められているのかもしれない⁽⁴⁾。

しかしながら、わたし自身が、原資料を含めてビアトリスの日記をすべて読んだわけではないことを十分、自覚しながらも、あえて主張してみたい点がある。つまり、彼女の日記すべてを読んでも、だれもショーの回答を実証することはできない、と。なぜなら、わたしが読んだ限りにおいて、ビアトリスの日記には、彼女とシドニーが「ウェップ夫妻」の業績に対して、それぞれどのような貢献をなしていたかに言及した個所を見出すことができなかったからである。

それでは、ウェップ夫妻の生涯にわたる研究の根幹に位置した労働組合主義研究に、シドニーとビアトリスの理論的貢献の違いを見出そうとする試みは、最初から、無謀な試みだと言わざるを得ないのだろうか⁽⁵⁾。

シドニーはビアトリスと出会うおよそ1年前の1888年末に、フェビアン協会の盟友であったE. ピーズが婚約した女性、E. ダヴィッドスンに宛てた書簡のなかで、次のような興味深い自身の「結婚観」を綴っていた。

「わたし自身の結婚観は、人格の統合を含んではおりません。知的一体化にすら反対です。さしあたりは、単なるパートナーシップとでもしておきましょう」⁽⁶⁾。このように独身時代のシドニーは、ショーののちの評価とは異なり、結婚によって両者の「統合」を求めていたわけではなく、「パートナーシップ」程度の関係で満足していたことが明かであった。すなわち、ウェップ夫妻は労働組合主義研究を含めて、多くの著作を連名で公表していたにもかかわらず、それらですら完全な「知的一体化」の産物とはみなしてはいなかった可能性が膨らんできたといえよう。ここに、本稿の依拠する観点がある。

本稿以下の一連の研究では、ウェップ夫妻の労働組合主義研究の頂点である『産業民主主義』（以下、『民主主義』と略記する）の理論が、独身時代のビアトリス・ボッターおよびシドニー・ウェップの理論活動とどのような関係に立つのか、すなわち、両者の理論的貢献を論じ分けることが可能なのではないかという仮説に基づいて論を進めていきたい。従来、ビアトリスの発案による「団体交渉」の概念に関しては、同概念がのちのウェップ夫妻の労働組合主義研究の重要な概念になっていたことは周知のことであった⁽⁷⁾。

しかしながら、わたしは、「団体交渉」以外にも、独身時代のビアトリスの研究と調査からうまれた重要なキーワードが複数、『民主主義』にも適用されており、同著においてそれらがウェップ夫妻による労働組合主義研究の分析に大きな役割を果たしていたと考えている。

そこで以下では、一連の研究のはじめとして、次のような構成で本稿の課題に迫ってみたい。第一節と第二節では、独身時代のビアトリスの研究と調査の出発点を確認するために、C. ブースの「ロンドン調査」に本格的に参加する以前の 1887 年半ばまでの彼女の活動に焦点を絞り、基本的にそこまでに登場したキーワードを析出する⁽⁸⁾。第三節では、それらのキーワードと『民主主義』との間を架橋する役割を担うと思われる、1891 年のビアトリスの『イギリスの協同組合運動』(以下、『運動』と略記する)を取り上げ、それらのキーワードの展開過程をたしかめてみよう。そして第四節では、うえで論じてきたキーワードが『民主主義』の労働組合主義分析において、どのような役割を果たしていたかを明確にして本稿の目的を果たしてみたい。

なお、本稿は出発点に過ぎないので、ウェップ夫妻の労働組合主義研究において、独身時代のシドニーの言説がどのような役割を果たしたのかについて分析することはしない。そして、「ロンドン調査」以降のビアトリスの研究と調査において登場するキーワードにも言及することはできない。これらの点の分析は、他日を期すこととし、早速、本稿の論を進めてみよう。

第一節の一 ハーバート・スペンサーの弟子

独身時代のビアトリスの言説の特徴を論じるにあたって、H. スペンサーの存在を抜きに語ることではできないであろう。かれとビアトリスの関係のはじまりから、その後を簡単に言及して本稿の分析をはじめてみたい。イギリス「社会学」の創設者で、19 世紀半ばには社会科学の世界におおいに影響をふりつたスペンサーは、ビアトリスの両親であるポッター夫妻の親しい友人であった。かれはポッター家の子供の家庭教師兼年上の友人として、同家に出入りし、なかでもビアトリスとは、きわめて友好的な関係にあった⁽⁹⁾。

これが、ビアトリスの初期の思想形成を論じるにあたって、なによりもスペンサーからの影響および、のちに述べるかれへの反発を論じなければならない所以である。ビアトリスが「総合哲学」を目指したスペンサーの著作を学ぶようになったのは彼女自身が、その含意を理解できるようになった年齢に達してからである。そして、ビアトリスの『わたしの徒弟時代』には、母親の死がその具体的な契機になったことが記されていた。1882 年のはじめの頃である。

「わたしが、『第一原理』を読み、生物学、心理学、社会学をとおして、かれの一般化に従ったのは、精神的な活力にみなぎった最初の年で、母の死の後であった。この一般化はわたしの精神に光を与えてくれた。たとえば、機能的適応の重要性は、のちにわたしが発展させた集団的規制の信念の大きな基礎であった。そして、社会組織の事実、科学的方法をいったん適用すると、イースト・エンドの生活、協同組合、工場法、労働組合主義に関するわたしの観察のなかに、レッセフェールのバイアスから完全に自由になった自分がいたことに驚いた。実際、わたしはレッセフェールからのいくらか暴力的な反応に、苦しんでいたからである」⁽¹⁰⁾。

この記述は、スペンサーが亡くなった 1903 年 12 月 8 日およびその翌日のビアトリスの日

記に基づいているため、彼女の評価はいくらか割り引かなければならないのかもしれない。しかし、のちにふれる「機能的適応」という用語が、スペンサーが含意していた通りの用法であったかどうかは別にして、かれからビアトリスが借用していた事実を述べていた点は重要であろう。いずれにせよ、スペンサー経由でビアトリスが考案し、のちの『民主主義』にも活かされていた用語の一つとして、はじめに「機能的適応」を掲げておきたい。この用語の詳細に関しては、のちにあらためて論じてみよう。

ともあれ、1880年代はじめの時期、スペンサーとビアトリスは38歳差の師弟関係を築いていたのである。さらに、1887年4月には、かれが、彼女に自分の遺著管理者（literary executor）になってくれるよう頼んでいた事実も指摘しておきたい⁽¹¹⁾。この時点でも、スペンサーがビアトリスに全幅の信頼を寄せていたことがわかる。しかしながら、このとき、ビアトリスが、スペンサーの要請に応えられるような真正の「スペンサーの弟子」といえる理論的志向を有していたかといえ、必ずしもそうとは言い切れない。この根拠についてものに論じてみよう。

以上述べてきたように、独身時代のビアトリスにとってスペンサーは、唯一無二の師匠であったといっても過言ではなかった。初期の彼女の思想は多くの点で、スペンサーに負っていたと言ってもよいであろう。そして、本稿で折にふれて指摘するように、スペンサーの影響とかれへの反発は、かなり長期にわたって、ビアトリスの思想形成の中心部分を占めていたと考えられる。ここでは、ビアトリスとスペンサーとの関係の出発点を確認したので、その後の彼女の研究および実践に目を転じることにしよう。

第一節の二 コンベンショナル・ミニマムの原型

1883年4月に、ビアトリスは姉のケイトの後を追うように、COS（Charity Organization Society）のソーホー委員会に入り、そこでの活動の一步を踏み出した。当時、ビアトリスは、スペンサーのつよい影響下にあったため、社会主義に反対し、厳格な個人主義を標榜していたCOSの哲学とも親和的であった。彼女が、ケイトの跡を引き継ぎ、無償でキャサリン・ビルの家賃集金人を始めたのは、1885年初頭になってからである⁽¹²⁾。

本稿が注目するキーワードのひとつが、ビアトリスの家賃集金人の経験によって、生まれたとみなせることに、ここで注意を喚起したい。それは、わたしが1992年11月に、経済学史学会で報告したことによって、はじめてあきらかになった、ナショナル・ミニマムの三層構造の基礎を形作るコンベンショナル・ミニマム（以下、CMと略記する）概念である⁽¹³⁾。あらかじめ述べれば、CMそれ自身が、この時期のビアトリスによって語られていたわけではなかった。しかし、のちの『民主主義』の地点から振り返ると、彼女はCM概念の含意を、ここで語っていたということが指摘できるのである。学会報告の時点で、わたしはCM概念がどのよう

にして生まれたかを実証できなかったので、本稿で初めて、それを論じてみたい。

家賃集金人を続けていたビアトリスは、1886 年 2 月に、初めての論文を『ペル・メル・ガゼット』紙に公表した⁽¹⁴⁾。同論文で彼女は、イースト・ロンドンの基幹産業であったドック業の衰退と関連付けながら、失業者の存在形態を分類し、失業対策のために自治体による公共事業を行っても、単に、地方の労働者を引きつけるだけで、効果はないと批判した⁽¹⁵⁾。換言すれば、このような首都での生活が、労働者階級のなかから「有閑の寄生階級」を生み出すとビアトリスは論じたのである。「寄生階級」という概念も興味深い概念だが、これについては本節の最後に言及してみたい。

初めての論文とそれへの反響の中で、ビアトリスは、CM という用語こそ用いていたわけではないが、含意としては CM の存在に、はじめて気がついたのである。以下の叙述に、読者の最大限の注意を喚起したい。

当時、ビアトリスと親しく、また失業問題に責任を負っていた地方自治庁長官でもあった、J. チェンバレンは彼女の論文を読み書簡を送った。ビアトリスは、その返信を同年 3 月に送ったのだが、ここに注目すべき、彼女の CM につながる認識が垣間見える⁽¹⁶⁾。チェンバレンに対して、彼女は失業対策としての自治体の公共事業が効果的ではないと主張した根拠を、以下のように、キャサリン・ビルに居住する賃金労働者との議論から得たと述べていた。

「労働者のなかのよりよい階級が、不熟練労働者のランクに永久的に沈む気持ちの用意がなく、失業対策のような仕事を受け入れてしまうと、自分のトレードで雇用を得る機会を失ってしまうだろうという、つよい感情が[かれらのなかに]あります」と指摘したのである⁽¹⁷⁾。

ここでビアトリスが述べたのは、一定の熟練を有している労働者は、たとえ失業していたとしても、単に、賃金の多寡だけで、仕事に就く存在ではないという点であった。かれらは、なによりも、トレードを重視していた。トレードで保証される賃金ないしは慣習こそは、かれらの生活信条を形成していたと言い換えてもよいであろう。ここに、わたしがかつて『民主主義』に依拠して整理した CM 概念の萌芽がみえるのである。

労働組合に組織されていようといまいと、一定の熟練労働者は、CM、すなわち「初期の共通規則」、「本能的な生活水準」あるいは「原始的防波堤」を有していた⁽¹⁸⁾。このように、のちの『民主主義』の視点からではあるが、うえて引用したビアトリスのチェンバレンへの書簡は、1886 年の時点で、彼女が CM 概念をつよく自覚していた証左といえるだろう。

最後に「寄生階級」に言及して本節を結んでみたい。チェンバレンへの書簡の後半で言及されていたのが「寄生階級」の存在であった。ビアトリスは「寄生階級」がなぜ、登場するのかという理由に関して、次のように説明していた。

「わたしの印象は、公共事業の仕事が、他の雇用との競争に入り込まないほど明かに不熟練であるのなら、それは[救貧法の]不名誉テストと同様に、本質的に退廃したものとなり、その仕事を与える生活手段によって、コミュニティに損害を与える寄生階級をもたらすことにな

ろう、というものです」と、言及していたのである⁽¹⁹⁾。

R. ハリソンを含めた従来のすべての論者が見落としてきたにもかかわらず、この一節は、荒削りながら『民主主義』の「寄生産業」の存在とその形成の論理を、ビアトリスがはじめて語っていた一節として最大限の注目に値しよう⁽²⁰⁾。「補助金」を受けた競争のない雇用が、退廃を生み出し、社会に損害を与えるという『民主主義』の読者にとってなじみ深い論理が、ブースの「ロンドン調査」に参加する以前の1886年はじめに、彼女によって展開されていたという事実を、驚きを込めて指摘しておきたい。

以上、本節は1886年までに、ビアトリスが社会科学や具体的な社会問題に目覚める契機となったスペンサーからの影響とキャサリン・ビルでの家賃集金人での経験を中心に論じてきた。ここで注目すべきことは、ビアトリスによってCM概念の萌芽的理解がみられ、「寄生階級」への言及が看取できる点であったといえよう。この点を確認して、その後のビアトリスの研究の深まりと経験を次節で論じてみたい。

第二節の一 スペンサーとの理論的確執

1886年4月17日のビアトリスの日記には、ブースが私的な調査として始めようとしていた「ロンドン調査」の最初の会合に、彼女が参加した事実とそれへの感想が記されていた⁽²¹⁾。ブースの調査協力者としての彼女の生活が、ここから始まったのである。同年7月には、ビアトリスは自分の意志で、経済学の修行に足を踏み入れた。以下では、彼女の経済学はどこから生まれ、どのようなものだったのかという点をはじめに探求してみたい。

1886年夏に、ビアトリスは経済学の歴史を学んで、9月に「イギリス経済学の勃興と成長(The Rise and Growth of English Economics)」(以下、「勃興と成長」と略記するときは、これを指すこととする。)と題した論文を完成させた。その後、彼女は同年末から87年初めにかけて、K. マルクスへの批判を織り交ぜながら、自分の経済学を構築することに集中した。これが、「カール・マルクスの経済理論(The Economic Theory of Karl Marx)」(以下、「経済理論」と略記する。)というタイトルの下に論文として完成したのは、87年の春であった⁽²²⁾。これらふたつの論文は公刊こそされなかったが、ビアトリス自身は内容に満足し、『わたしの徒弟時代』の付録に掲載すると語っていた⁽²³⁾。両論文はたしかにビアトリスの言葉通り、その後の彼女の経済理論および政策思想を理解するうえで不可欠の検討材料を提供しているといえる。

最初に、「勃興と成長」を取り上げるべきだが、本稿はその原稿を発見しておらず、残念ながら参照することができない。しかし、ビアトリスが「勃興と成長」を86年10月にスペンサーに送付し、それに対するかれの返事が『わたしの徒弟時代』に再録されていた。ここから、「勃興と成長」の論理を跡付けてみよう⁽²⁴⁾。

スペンサーは、「旧い経済学の原則に対して、あなたがした最近の反論は、わたしが理解し

た限りにおいては、正しくはなされていないと思います」と返信のなかで記し、彼女の経済学理解に異を唱えたのであった⁽²⁵⁾。すなわち、結論をあらかじめ述べれば、経済学および社会問題の理解に関しては、この時点で、ビアトリスとスペンサーは袂を分かったと言っても過言ではなかった。

「勃興と成長」ののちに書かれた「経済理論」および、彼女の日記に残されていたスペンサーの返事に対する彼女の不満に基づいて、さらに両者の論点を掘り下げてみよう。

ビアトリスは、社会制度の研究こそ研究される必要があると考えていた。そして、彼女は「各タイプの組織（あるいは、組織の欠如）、各社会制度はそれ自身に特有の「社会的疾病」をもっている。そして「社会的疾病」は、他のそれを補完する社会制度の存在や発展によって、阻止されない限り、老衰や死に至るものであることを発見した」のである⁽²⁶⁾。このような理解は、ビアトリスが従来の経済学が、生理学のアナロジーで語られ、病理学を無視して構築されたとする不満に基づいていた。

それに対して、スペンサーは、生理学は病理学を無視して成立したのだから、病理学、すなわち社会問題への視点を経済学に求めることはできないと反論したのである⁽²⁷⁾。それに対して、彼女は、『日記』で、生理学に関するスペンサーの理解を追認しながらも、「疾病の科学が健康の科学より先んじなかったかは疑問である。それにしても、ハーバート・スペンサーは歴史的なセンスがない」と批判していた⁽²⁸⁾。

また、論点は重なるが、スペンサーによれば、産業活動の標準的な関係を考慮するのが、まさに経済学の課題であり、経済学は、これらの活動のなかの無秩序とか、それらに対する障害をまったく考慮するものではなかった⁽²⁹⁾。しかしながら、ビアトリスは、それは経済学の第一のステップでしかないと批判し、自論を展開していた。すなわち、経済学はそれに留まるのではなく、ここから「できるだけ、われわれはさまざまな経済的疾患を理解することを通じて、なにが標準的なのか、あるいは、言い方を変えれば、なにが健康的なのかを発見することができるのだ」と主張していたのである⁽³⁰⁾。

ここからみえてくるのは、いわゆる社会問題に対するスペンサーの（あるとすれば）処方箋が、「経済学の原則の再調整ではなく、可能な限り、自由競争と自由契約を確立すること」に帰着するという点である⁽³¹⁾。このような見解に対して、彼女は、「あきらかに、かれは経済学を統治の方法のひとつとしかみておらず、社会学の一部門とみていないのだ。すなわち、人間の一部の科学としてみていないのだ。科学の目的は、なにかを発見することなのである。」と『日記』でつよい不満をもらしていた⁽³²⁾。

以上のように、1886年10月の時点で、ビアトリスは、経済学を「社会科学」のひとつとみず、「社会問題」に対する視点をも欠いたスペンサーに対して、つよい疑問を抱いたといえよう。しかしながら、この事実のみをもって、彼女がスペンサーの方法や理論的志向から離れたと即断することはできまい。それは、その後のビアトリスの「経済理論」に関する考察から明らか

となろう。

第二節の二 「能力と欲求の経済学」の誕生

1887 年春にまとめられたと思われる論文、「経済理論」のエッセンスは、「価値論を考えると、価値とは能力（faculty）の発揮によって欲求（desire）が満たされるところに生じるのだという観念に達した。「使用価値」とは、人間が自分で作った食料を食べるように、うえの能力が発揮され、欲求の満足が結合された場合、一個人のなかに生じるといえるかもしれない。「交換価値」とは、この結合が、不可避免的に、ふたりないしそれ以上の個人間の関係を伴うものであろう」とする一節にみられた⁽³³⁾。

みられるように、ビアトリスの「価値論」は「使用価値」、「交換価値」というマルクスの経済学の用語そのものを使用していたにもかかわらず、その根幹部分である「労働価値説」を拒否する経済理論であった。ともあれ、今後のために、うえのビアトリスの経済学を「能力と欲求の経済学」と名付けて論を先にすすめてみよう。

「能力と欲求の経済学」は、近年でも江里口が注目していたように、その存在自体は決していられていないわけではなかった。それでは、マルクスの経済学を拒否した「能力と欲求の経済学」に関して、そもそも、ビアトリスはどこからその構想のヒントを得たのだろうか。残念ながら、江里口は、この点について、まったく関心を示しておらず、よって言及もしていない⁽³⁴⁾。しかしながら、本格的には第四節で指摘するが、「能力と欲求の経済学」は『民主主義』にも受け継がれていたきわめて重要なキーワードのひとつだった。よって、「能力と欲求の経済学」の起源を探る意義は、きわめて大きいといえるだろう。

管見する限り、ビアトリス自身が「能力と欲求の経済学」の出自を語った文書は存在しない。しかしながら、わたしは、やはりスペンサーにその起源が求められるのではないかとみている。その根拠を以下、指摘してみよう。1850 年に刊行されたスペンサーの『社会静学』はかれの処女作で、のちの「総合哲学」への第一歩を刻んだ記念碑的な著作だった⁽³⁵⁾。同著のなかには「能力と欲求の経済学」を彷彿とさせる次のようなスペンサーの「幸福」論があった。やや長い、同著第 4 章「第一原理の派生」の冒頭部分から引用してみたい。

「幸福は一定の意識の状態である。その状態は、一定の親愛の情によって修正を受けた、作用という意識のうえでの活動によって生み出されなければならない。すべての親愛の情という意識を、われわれは感動と名付ける。とりわけ、幸福を構成する親愛の情は、感動でなければならない。しかし、われわれはいかに、感動を受けとめるのか？能力（faculties）と言われるものを通じてである。人間は目が不自由であれば見ることはできないのは確かである。人間は印象を受けることができる一定の力が賦与されない限り、どのような種類の印象も経験できないことも、同様にたしかである。すなわち、それが能力（faculty）である。人間が感情とか理

念とか呼ぶすべての精神状態は、能力によって与えられた感動、すなわち、能力を通して受け止められた親愛の情という意識のことなのである。そうすると、次の疑問が生じる。どのような状況下で、能力は、幸福を構成する感動を生み出すのか？その答えは、能力が発揮されたときである。すべての満足が生じるのは、能力のひとつかそれ以上の活動からである。…問題を次のように簡単に述べてもいいかもしれない。欲求 (desire) はいくつかの種類の感動についての必要 (need) である。感動は能力の発揮によってのみ、生まれるのである。ここから、能力の発揮を通すことなしに、欲求は満たされ得ないのである。しかし、幸福はすべての欲求の当然の満足から成っている。すなわち、幸福はすべての能力の当然の発揮によって成っているのである」⁽³⁶⁾。

「能力と欲求の経済学」において、ピアトリスは、スペンサーと比べると、直截に「幸福」を論じていたわけではなかった。しかし、彼女が、哲学的に「幸福」と呼ばれているものを、経済学的には、どう翻案するかという問題意識をもつことに、とくに抵抗は少なかったのではないかと指摘したい。なぜなら、ピアトリスは「経済理論」において、「経済学」を「富」の生産の科学と呼んでいた旧経済学を徹底的に批判していたからである⁽³⁷⁾。自分の経済学を探していた彼女には、スペンサーの「幸福」論は、マルクスを拒否する経済理論のベースにするのに格好の方法論を提供していると受け止められたのではあるまいか。すなわち、スペンサーの「感動」がピアトリスの「価値」と読み替えられたのではないかという点も付言したうえで、かれの『社会静学』の「幸福」論が、ピアトリスの「能力と欲求の経済学」の下敷きになった「定義」だとみなすことが可能ではないかとここで主張しておきたい。

以上本節は、1886年後半から翌年にかけてピアトリスが執筆したふたつの論文を中心に考察してきた。その結果、社会問題に関する無理解なスペンサーから、相対的には距離をおこうとしたピアトリスの姿が浮かび上がってきたといえよう。しかしながら重要なのは、彼女の経済学である「能力と欲求の経済学」は、スペンサーの「幸福」論を下敷きに構想されたのではないかという点であった。本節の分析によって、1887年はじめの「経済理論」において、彼女はスペンサーの『社会静学』を手本にして、それをマルクス批判の強力な武器に利用したことで、「能力と欲求の経済学」に到達したといえるのではないかと指摘できよう。

前節および本節では、1887年半ばまでにピアトリがおこなってきた研究および実践の中から登場した、彼女のキーワードを析出してきた。これらのキーワードが、『民主主義』でどのように活かされていたかを実証することが本稿の後半で求められていよう。このためにも、次節では、1891年のピアトリスの『運動』の論理を参照して、これまで指摘してきた彼女のキーワードが、同著でどのように論じられていたかをたしかめてみたい。

第三節の一 コンベンショナル・ミニマムの発展

独身時代のビアトリスの唯一の著作である『運動』は、彼女個人の研究史からみて、きわめて画期となる著作であった。準備期間は別として、『運動』を完成させたことで、次の研究である労働組合主義研究をシドニーとともに進めていこうと決断したからである⁽³⁸⁾。このように、『運動』は、ビアトリスとウェップ夫妻の労働組合主義研究をつなぐ重要な環の位置にあった。前節までで析出したキーワードが、『運動』でどう継承されていたか、あるいは継承されなかったかを検証することで、それらと『民主主義』の関係のなかの、いわば中間地点の位置関係がたしかめられよう。

前節までで本稿が注目したビアトリスのキーワードのうち、『運動』において、「寄生階級」ないしはそれに類似した概念が登場しないことをはじめに、述べておきたい。その代わりに、ふたつの概念ないし用語を追加することをお断りしたい。最初のものは、第一節でスペンサーとの関係で指摘した「機能的適応」(functional adaptation)である。同概念は1887年なかばまでのビアトリスの言説にはたしかに登場しない。しかしながら、のちにみるように、同概念は『運動』において登場し、『民主主義』では、「能力と欲求の経済学」とセットで語られるようになる。

また、「進歩」(progress)も分析の対象に加えてみたい。これは一見、普通名詞のようにみえるが、あらかじめ述べれば、うへの「機能的適応」とともに『民主主義』におけるキーワードのひとつであったと考えられる。本稿の目的を果たすために、ふたつのキーワードを追加的に分析することをあらかじめ了解願いたい。

ビアトリスのCM概念が、1886年時点だけの思い付きではなかったことを、『運動』の叙述から指摘して本節をはじめてみよう。彼女は同著においても、次のようなエピソード風の話でCM概念の存在に言及していた。「わたしは熱心な協同組合員に、古い掛け売りの小さな商店によって〔商品が〕提供されている労働者街で受けとる賃金より、第一級の協同組合店舗の近所で、それより低い賃金を受け入れるかどうかを聞いたことを思い出す。かれは強い自信をもって「もちろん、受け入れる」と答えた。それから、一拍おいて、悲しく低い調子ではあるが、おとなしい態度でこう付け加えた「少なくとも、労働組合が認めてくれるなら」と」⁽³⁹⁾。

このエピソードは、概念としてのCMの発展を予感させる一節でもあると指摘できよう。読者のなかには、うへの評価は、1886年時点でのビアトリスの評価とは正反対ではないかと訝る読者もいよう。「低い賃金」でも受け入れると言っていたのだから。しかし、ここで注目されたいのは、労働組合の存在である。協同組合員でもあるうへの労働者は「労働組合が認めてくれるなら」と、その前提条件をつよく意識していた。すなわち、ここでは労働組合という組織と関係したトレードの存在がかれの行動規範となっていたのである。

トレードで保証される賃金ないしは慣習こそは、まともな労働者であるならば守らなければ

ばならない規範だった。労働組合をつよく意識した『運動』におけるピアトリスの指摘は、旧稿で論じたように、シドニーの発想だと思われていたモラル・ミニマム（以下、MM と略記）に通じる、きわめて興味深い、彼女の理論の発展であるといえるかもしれない⁽⁴⁰⁾。この点の詳細に関しては、シドニーに関する別の研究で深めてみたい。

ここでみたように、1886 年に確認した CM 概念の萌芽は、確実にその後のピアトリスの分析にも受け継がれ、発展させられていた。そして旧稿でも指摘したように『民主主義』においては、CM は NM 概念の基礎を形作ったと考えられるのである⁽⁴¹⁾。

第三節の二 「協同組合運動」の経済学

『運動』では、「能力と欲求の経済学」も引き継がれた。しかし、それは決して単純な継承関係とはいえなかった。ピアトリスは第一章「協同の理念」で、工場法および協同組合運動の推進者である R. オーエンを、「イギリス社会主義の父」とたかく評価していた⁽⁴²⁾。他方、かれの経済学に目を向けると欠点および誤謬で満ちていた。このような文脈で、「能力と欲求の経済学」が、協同組合運動を支える「正しい」理論として登場していたのである。少し立ち入って、この論理を再現してみよう。

厳密に言えば、ピアトリスが問題にしたのはオーエンではなく、オーエン運動の指導的人物であったウィリアム・トムソンの経済学であった。トムソンは「あらゆる商品の市場価値はそこに包含されている労働の量によって測られ得る。そして労働の価値はそれに費やされた時間によって見積もられ得る。最後に、すべての熟練労働は平均的な労働の倍数に分解され得る」と主張した⁽⁴³⁾。

この理論がもとになって、オーエンの労働交換所が実践されたのである。そして、ピアトリスは、トムソンの価値論がのちのマルクスの『資本論』にとりいれられた理論であったとも付言していた⁽⁴⁴⁾。さしあたり、ここでは経済学の理論史において、マルクスがトムソンの理論を取り入れたという評価が妥当するかは問わないで論をすすめてみよう。

それでは、彼女の目には、トムソン（つまり、含意としては、マルクスの経済学）の価値論のなにが問題だと映ったのだろうか。直截的に言えば、ピアトリスは「抽象的労働」という概念を受け入れることができなかったのである。「イギリス人は、強度や質のすべての不平等がただしく除去され得る、抽象的労働という概念を心に抱くことができない」⁽⁴⁵⁾。換言すれば、ここでも、「労働価値説」を受け入れることはできないというのが、ピアトリスの立場であった。

しかしながら、彼女によれば、過去半世紀の卸売組合の経験によって、トムソンの「誤った交換価値」の理解に基づいた実践はなくなり、協同組合員は「正しい経済学」(sound economics) を教えられるに至った。「かれらはついに、トムソンの価値論を放棄する一方、価値を決定する要因は効用 (utility) であると全面的に理解し、人間の能力 (faculties) と人

間の欲求（desires）の間の一致に作用する慎重な試みをおこなうことが、自分たちの成功」の要因であることに気づいたといえるのである⁽⁴⁶⁾。

以上論じたように、「能力と欲求の経済学」は『運動』においても、それを支えていた経済学であった。トムソンの経済学、すなわち、彼女の洞察を類推すれば、マルクスの経済学は「能力と欲求の経済学」に照らして受け入れることはできなかった。ここまでは、「能力と欲求の経済学」の成立の背景を論じた前節の分析通りであった。しかしながら注意すべきなのは、ビアトリスが「能力と欲求の経済学」を「効用価値説」の根本に位置する経済理論であると読み替えていた点である。ここに、彼女の経済学の発展および変化を指摘することができよう。

第三節の三 「協同組合運動」の「機能的適応」

本節の冒頭でも指摘したように、「機能的適応」という概念は『運動』において登場していた。それは、第一章「協同の理念」のなかであった。ビアトリスによれば、同概念は、「産業革命」を経験したイギリスにおいて生じた、ふたつの大きな経済思想の流れの一方を特徴づける概念であった。そのふたつとは、普遍的競争主義と競争に代わる協同制度の信条であった。協同組合運動が後者から生じることは詳述するまでもなかろう。そして、ビアトリスは両者の違いを明確にするために、対応する生物学上の法則に還元して説明したのである。それが、「適者生存」と「機能的適応」であった⁽⁴⁷⁾。

ここでは、両者がともにスペンサーの造語であった点に、あらためて大きな注意を払われたい。用語の含意は別として、ビアトリスは社会の進化を生物学的な進化のアナロジーで語るスペンサーの方法を、『運動』においても採用していたといえよう。

協同組合運動の「法則」は、「機能的適応」である。そして注目すべきことは、オーエンがまさに「機能的適応」に沿って、社会を分析していたとビアトリスが語っていた点である。「オーエンは、工場で働くすべての人々は、かれらの心身の発達を阻害する日常生活のために、だんだん墮落していると主張した。人間の高度な能力（faculties）がまったく用いられることなく、かつ、年中、栄養不足、過重な労働、不衛生な状態であるために、この男女、子どもの大軍が人為的に、粗暴な精神と脆弱な肉体しかもたない国民に変えられているのである」⁽⁴⁸⁾。このような状態に対して、オーエンは逆の命題を主張したと、ビアトリスは指摘した。

「かれは、もしわれわれが、これらの人々の子どもを健全な環境に移して、心身の能力（faculties）を鍛錬するならば、日々の活動におけるこの変化が性格の変化ももたらすであろうと断言した。このように、ロバート・オーエンは生物学上の法則である機能的適応にもとづいて「自分の改革論を」主張し、それを国民の集合的な性格に適用したのである」⁽⁴⁹⁾。

『運動』では、「機能的適応」の用法はここだけでしか確認できないので、同著の段階での「機能的適応」の含意を以下、考察してみよう。ビアトリスは、オーエンの「機能的適応」の用法

を誇張した未熟な用法であり、かつ、他の重要な要因を無視していたと批判もしていた⁽⁵⁰⁾。しかしながら、オーエンが注目した最初の事例に目を向けると、そこには「能力」が使われな
くと同時に、「欲求」自身も低いか、あるいは満たされない状態の人間が多数いることが指摘
されていたことに気づく。そして、オーエンの場合、子どもに限定しているが、かれらに良好な
環境を提供して、「能力」を発揮させること、これが「機能的適応」の論理であるように思わ
れる。

ここから、ビアトリスが使う「機能的適応」とは、「能力と欲求の経済学」において「価値」
を実現するための方法を生物学的に論じた呼称であったと推測できる。彼女の論理に戻せば、
「普遍的競争」すなわち「適者生存」のみが進めば、「社会的疾病」が発生する。そのオールタ
ナティブとして、「普遍的競争」に対する一定の規制が含意された「協同制度」の信条が掲げ
られたのである。そして、「機能的適応」によって人間の「能力」が発揮され、「欲求」が満た
されることで「社会的疾病」が克服できると想定されていたといえよう。

最後に、「進歩」(progress)に関して簡単にふれて本節をまとめてみたい。「進歩」という
用語それ自身は、『運動』でも数箇所みられるが、ここでは用法として次を参照して、その含
意をたしかめてみよう。『運動』の最終章「結論」で、ビアトリスは「道徳的改革者として、
協同組合員は人類進歩 (human progress) において抜群の前衛に位置しているのである」と
同書全体を締めくくっていた⁽⁵¹⁾。彼女の協同組合運動に対する限りない期待の大きさがよくあ
らわれている評価であるが、ここで述べられていた「進歩」とは「望ましいこと」であるとい
う含意があったことを確認したい。ここで「進歩」を取り上げたのは、スペンサーも使ってい
た「進歩」の含意とビアトリスのその含意とを最後に比較したいからである。

以上、本節は、主に 1887 年半ばまでにビアトリスの言説に登場していたキーワードが、
1891 年の『運動』において、どのように継承・発展されていたかを分析してきた。そして、
まず CM 概念の萌芽は『運動』においても継承され、MM にも発展できるような概念として
理解されていたことをたしかめた。

また、「能力と欲求の経済学」も『運動』にみられたが、この時点でビアトリスはそれを「効
用価値説」の根本に位置する経済理解であると読み替えていたという点が明かになった。また、
「機能的適応」は『運動』で登場していた概念であったが、同概念は「能力と欲求の経済学」
における「価値」を実現するための方法を生物学的に表現した呼称であることを本節は明確に
したといえよう。最後に、「進歩」に関しては、ビアトリスはそれを、「望ましいこと」と理解
して『運動』で使用していたことを確認した。

以上、本節は『運動』それ自身の論理に言及することはできなかったが、前節までに析出
したキーワードが一定の変化を伴いながらも同著で展開されていた事実を確認したといえよう。
その際、あらたに注目したキーワードも、スペンサーの造語からビアトリスが借用していた事
実が明らかになった点も付言しておきたい。これらのキーワードが『民主主義』で、どのよう

に、継承されていたのか否かは、節を改めて論じてみたい。

第四節 『産業民主主義』のなかのビアトリス・ウェップ

本来であれば、『民主主義』において、これまでの節で論じてきたキーワードが、同著全体でどのように論じられたかを分析することが本節の課題であろう。ただ、残念ながら、本稿にはその課題を果たす用意がない。そこで、ナショナル・ミニマム（NM）が導出される論理が展開されている章として、これまでつとに注目されてきた、同著第三篇「労働組合の理論」第三章「労働組合主義の経済的特質」に限定して、キーワードの展開過程を以下、追跡してみたい⁽⁵²⁾。なお、CMについては先に指摘したように旧稿ですでに論じているので、ここでは取り上げないことをあらかじめお断りしたい。

管見する限り、同章の冒頭部分の次の注記にはこれまでほとんど関心が向けられてこなかった。しかしながら、ここには本稿全体の課題からみてきわめて興味深い内容が盛り込まれていた。きわめて重要な箇所なので、この引用から本節を始めることにしよう。

「ここでも、また、本章全般にわたっても、われわれは社会にとって「進歩」（“progress”）とは望ましいものであるという仮説に立って、論を進めることにする。すなわち、その成員は増大する能力（faculties）を発展させ、ますます複雑になる欲求（desires）を満足させることで、代々にわたって、より広範でより充実した人生に達するべきだということである。それゆえに、もしわれわれが、単に「最適者の選択」（Selection of the fittest）という用語を用いる場合には、それはこの社会進化の目的を達成するのにもっともふさわしいということの意味しているのである。また、「機能的適応」（Functional adaptation）という用語によって、われわれは、能力と欲求の強度および複雑さが増進していることに対して、個人がそれに適応することを意味しているのである」⁽⁵³⁾。

以上のように、この一節は、第三章に限らず『民主主義』全体の理論的基調を示唆するきわめて重要な一節であったことが明らかであろう。しかも、ここに、これまでの節でとりあげてきた「能力」、「欲求」、「機能的適応」および「進歩」という用語が、集約されて論じられていたのである。本稿の課題に対する回答とも言うべき評価が、ここに論じられているといえよう。

管見する限り、「最適者の選択」は、『運動』および1887年半ばまでは登場していなかったが、『民主主義』では「機能的適応」とセットで語られていた。よって、以下でも両者を一体のものとして扱い、それらが同著でどのように論じられていたかをはじめに明確にしてみたい。

結論的に言うならば、「最適者の選択」と「機能的適応」は、NMの基礎にあたるコモン・ルールの方法と目的に合致した用語であった。まず、「最適者の選択」がどのようにコモン・ルールと関係するのかという点を、やや長いですが、もっとも明瞭に説明した次の一節を参照してみよ

う。「最低雇用条件が固定され、統一されるとき、競争は質の水準を引き上げる形態をとり、また、これらの最低条件が相対的に高いところでは、採用された希望者は多数の応募者の中から選ばれたのであるから、非常に選抜された階級となり、個人的には補充し得ても集合的には取り替えられ得ない存在となる。このようにして、絶えず「最適者の選択」を促進することによって累進的にコモン・ルール」が促進されることとなるのである⁽⁵⁴⁾。

ウェッブ夫妻によれば、旧い労働組合が実施していた「人員制限」とは対照的に、人員補充の際、「開放的」すなわち競争的でかつ「最低雇用条件」が提示されることになれば、新規に採用される労働者は必然的に多数の候補者のなかから、しかも相対的に優秀な労働者が選抜される。これこそが「最適者の選択」の論理である。他方、使用者にとっても、優秀な労働者を採用できるメリットが生じる⁽⁵⁵⁾。このように、「最適者の選択」は、コモン・ルールの前提であり、かつそれを量および質的に推進する機能を有していたといえよう。

他方、「機能的適応」の典型的な使用法としては、次の一節が挙げられる。「このように、コモン・ルールが産業組織に及ぼす影響は、その筋肉労働者および頭脳労働をなす企業者に対してと同様に、すべて効率増進の方向に向かっていく。…手短かに言うと、労働に関してであれ、資本に関してであれ、発明や組織的な能力に関してであれ、そのいずれにおいても、どのような産業においても、統一的なコモン・ルールが単に存在するだけで、生産におけるもっとも効率的な要因の選択と同様に、産業組織のもっとも先進的なタイプのなかで、より高い水準に、かつ、その結合に対して、進歩的な機能的適応を促進するのである」⁽⁵⁶⁾。

これまでの引用から、「機能的適応」とは、統一的なコモン・ルールの設定に伴って、「能力」と「欲求」が結合することで、労働者、生産組織、発明などの生産要素のなかで、最高かつもっとも効率的な生産要素が選択され、その水準が累進的に引き上げられるという変化を質的に示した用語であったと指摘できよう。「最適者の選択」と「機能的適応」は、このように量的および質的に、両者が一体となって、コモン・ルールの設定によってもたらされると同時に、その前提条件を絶えず向上させる役割を担っていた。だからこそ、ウェッブ夫妻によれば、両者の機能によって「進歩」がもたらされるのである。

以上みてきたように、「最適者の選択」と「機能的適応」は、ウェッブ夫妻にとって、『民主主義』における結論的命題であるコモン・ルールおよびナショナル・ミニマムを導出する決定的な方法的視点であったことが明らかとなったといえよう。「最適者の選択」というキーワードについては現段階では詳らかにできないので今後の課題であるが、「機能的適応」については、これまでの分析から『民主主義』にいたるそのキーワードの変遷をまとめることができる。

すなわち、「機能的適応」は、ビアトリスがスペンサーから学んだ用語であった。第三節でみたように、彼女は『運動』においてはじめて「効用価値説」を唱え、その根本に「機能的適応」を据えていた。「機能的適応」はそこで、1887年にまとめた「能力と欲求の経済学」の「価

値」を実現するための方法として使用されたものであった。そして、うえてみてきたように、『民主主義』において「機能的適応」は、労働組合主義研究の進歩的な歴史を理論的に総括する、まさに中核的な視点として活かされるにいたったと指摘できよう。

次に、「能力」と「欲求」を取り上げてみたい。これらふたつのキーワードは、一見するととくに含蓄のある用語とはみえず、ともすれば、その重要性が見落とされがちな用語であるといえよう。『民主主義』だけを参照している限り、だれもその意義に気づくことはできないと思われる。しかしながら、本稿が追及してきたように、このふたつのキーワードは、ビアトリリスの社会認識をもっとも端的に表す用語であった。そして、それは『民主主義』にも使用されていたのである。「労働組合の理論」のなかで、きわめて重要な主張がみられるので、その一節を引用して、このふたつのキーワードが同著でどのように含意されていたかを確かめてみよう。

「人間社会においても、動物界と同様に、より小さな能力とわずかな欲求（smaller faculties and fewer desires）しか所有していないことがその特徴である、寄生によって発展したより低い形態〔の産業〕は、必ずしも、自由競争によって除去されない傾向をもつ」⁽⁵⁷⁾。これは、第三章のなかでも重要な分析対象のひとつである「寄生産業」を論じた一部分である。補助金または奨励金によって恩恵を得た産業は、そのおかげで「自由競争」によっても排除されず、逆に、競争者を打ち負かす産業であった。したがって、低い労働条件を放置する温床となっていた。ウェップ夫妻にとって、克服すべきこの「寄生産業」は、「能力」と「欲求」が小さいことが特徴であったということを、うへの引用は示していたのである。

ウェップ夫妻によれば、コモン・ルールおよびNMの対極に位置する「寄生産業」は、「能力」と「欲求」が結合していない、もしくはそれらが小さいことによって生み出されていた。これは「進歩」の対極に位置する「退廃」（Degeneration）であった⁽⁵⁸⁾。これまでの本稿の分析に親しんできた読者にとって、うへの引用は、違和感なく受け入れられる一節であろう。「能力」と「欲求」の結合によって「価値」が生み出されるとする独身時代のビアトリリスの「能力と欲求の経済学」が、『民主主義』において「寄生産業」分析の際に活かされていたと確認できるからである。

『民主主義』において「能力と欲求の経済学」が、同著を支える経済学理解であったかと問われれば、必ずしもそうとは言えないかもしれない。今後の研究でたしかめなければならない重要な論点のひとつであると思われる。しかしながら、うへの引用から、ウェップ夫妻の労働組合主義研究において、「能力」と「欲求」は、その結合の有無ないしは多寡によっては、コモン・ルールおよびNMが導出される場合もあれば、「寄生産業」すなわち「退廃」が生み出される場合も生じるとする、決定的なメルクマールとなっていたと主張することができよう。そして、以上みてきた「機能的適応」（および「最適者選択」）、「能力」、「欲求」の高度な結合によって、「進歩」概念が構築されていたのである。

最後に、一点だけ確認して本節をまとめてみよう。1886 年はじめに「寄生階級」という興味深い概念を使っていたビアトリスは、当時、必ずしも「能力」と「欲求」の未結合ないしはその低水準という文脈で、同概念を使用したわけではなかったと思われる。しかし、「寄生階級」は、「能力と欲求の経済学」を理論的ベースにしてそのおよそ 10 年後に、「寄生産業」として今度は、ウェッブ夫妻の重要なキーワードとして再整理されたとみることができよう。

以上、本節はこれまでの分析で析出してきたキーワードが、『民主主義』においてどのように使用されていたのか、換言すれば、ウェッブ夫妻の労働組合主義研究において、それらのキーワードがどのような役割を果たしてきたかを論じてきた。その結果、「機能的適応」とは、「最適者の選択」と一体となって、『民主主義』における結論的命題であるコモン・ルールおよびナショナル・ミニマムを導出する決定的な方法的視点になっていたことが明らかになったといえよう。また「能力」と「欲求」はその結合の有無ないしは多寡によって、コモン・ルールおよびナショナル・ミニマムが導出される場合もあれば、「寄生産業」すなわち「退廃」が生みだされる場合も生じるとする、決定的なメルクマールとなっていたと主張できた。そして、これらのキーワードが結合されて「進歩」すなわち、社会にとって「望ましいこと」を構成していたと、ウェッブ夫妻は定式化したと言えよう⁽⁵⁹⁾。

むすび

本稿は、1887 年半ばまでのビアトリスの研究および調査によって生み出されたキーワードが、のちのウェッブ夫妻の労働組合主義研究にどのように活かされていたかを探求してきた。

ビアトリスは 1886 年までに、社会科学や具体的な社会問題に関心を持ち始め、直接的な師弟関係にあったスペンサーの学問を学んだ。また同時期に、COS の家賃集金人を経験して、のちのナショナル・ミニマムの構造を支えた CM 概念の萌芽と「寄生階級」を発見したのである。これが第一節で明らかにした点であった。

第二節では、1886 年から 87 年にかけて、ビアトリスが自分の経済学を完成させ、それをふたつの論文に結実させていたことを明らかにした。この時点で、ビアトリスは社会問題に対して無理解なスペンサーから相対的に、距離をおこうとしながらも他方で、かれの影響を色濃く受けた経済学を構築した。これが「能力と欲求の経済学」であった。「能力」と「欲求」が結合されてはじめて「価値」が生まれるとしたビアトリスの「能力と欲求の経済学」は、その後の彼女の社会科学理論のベースになるものであった。

第一、第二節で析出したキーワードが、1891 年の『運動』でどのように論じられたかを明確にしたのが第三節であった。ここで、「機能的適応」と「進歩」のふたつの概念も含めて、分析した結果、まず、CM 概念の萌芽が『運動』にも継承され、MM も展望できる概念へと理解されていたことを明らかにした。また「能力と欲求の経済学」は『運動』において、「効用

価値説」の根本に位置する経済理解であると読み替えられていた点も明確にしたといえよう。

さらに、「機能的適応」は「能力と欲求の経済学」における「価値」を実現するための方法を生物学的に表現した呼称であったこともたしかめられた。そして最後に「進歩」は同著で、「望ましいこと」と理解されていた点も確認したといえよう。

第四節では、それまでの分析で析出してきたキーワードが、ウェッブ夫妻の労働組合主義研究において、どのような役割を果たしていたかを明確にした。その結果、「機能的適応」とは、「最適者の選択」と一体となって、『民主主義』における結論的命題であるコモン・ルールおよびナショナル・ミニマムを導出する決定的な方法的視点になっていたことが明らかになったといえよう。また「能力」と「欲求」はその結合の有無ないしは多寡によって、コモン・ルールおよびナショナル・ミニマムが導出される場合もあれば、「寄生産業」ないしは「退廃」が生みだされる場合も生じるとする、決定的なメルクマールとなっていたと主張した。そして、これらのキーワードが結合されて「進歩」すなわち、社会にとって「望ましいこと」を構成していたと、ウェッブ夫妻は定式化したと本稿は結論付けたのである。

以上の分析から明かになったのは、ウェッブ夫妻の労働組合主義研究の構造には、ビアトリスが社会科学に興味を持ち始めた、その出発点において学んだスペンサーの学問や彼女自身の「事実発見」が非常に大きな影響を与えていたという点であった。しかしながら、ビアトリスが借用したスペンサーの用語が、かれ本来の含意をそのまま引き継ぐものだったかといえそうではなかった。たとえば、「進歩」というキーワードに目を向けてみよう。

スペンサーは1857年に「進歩」というエッセーを記し、「一般に通用している進歩の観念は目的論的である。進歩という現象は、人間の幸福増大とのかかわりにおいてのみとらえられている。そして、それらの変化は、直接間接に、人間の幸福を高める傾向があるときのみに進歩と認められる。…しかし、進歩を正しく理解するためには、利害から離れて考察し、これらの変化の本質を学ばなければならないのである」と、今日でいえば常識的な進歩理解を批判していた⁽⁶⁰⁾。スペンサーに言わせれば、本稿でみてきたビアトリスおよびウェッブ夫妻の「進歩」理解はまさに批判の対象であったといえる。

このようにみてくると、スペンサーの学問が、ビアトリスを経由してウェッブ夫妻の労働組合主義研究につよい影響を与えていたと主張することにはおおきな留保を付加しなければならぬまい。D. E. ノードが指摘したように、ウェッブ夫妻は「スペンサーに反してスペンサーを使った」という評価はうえのような意味で傾聴に値するものといえよう⁽⁶¹⁾。

本稿で意識しながら明確な見通しすら与えることができなかった論点も多々、残っている。たとえば、独身時代のビアトリスの研究にはスペンサーの影響が tydよくみられると指摘はしたが、シドニー・ウェッブもその可能性がなかったとはいえない。これらの点は、本稿の続編で取り上げてみたい。

〔注〕

- (1) G. Bernard Shaw and Editor, "Early Days" in M. Cole ed., *The Webbs and their work*, London, 1949, p.13.
- (2) この論文は、当初、ショーに対して M. コールから執筆が依頼されたものであった。しかし、ショーがこれを拒絶したことを受けて、コールが書面で質問を送ったことに対してショーが回答するという形式となった。*Ibid*, p.3.
- (3) B. Drake & M. I. Cole, *Our Partnership*, London, 1948. Norman & Jeanne Mackenzie, eds., *The Diary of Beatrice Webb*, Vol. 1-4. London, 1982-1985.
- (4) 1980 年代に、マッケンジー夫妻によって編集されたビアトリスの「日記」でも、すべての日記が収められていたわけではない。彼女の「日記」すべてを見ようとしても、それにはふたつの「形態」がある。ひとつは多くの研究者が使用している「タイプ版」であるが、もうひとつは「マニスクリプト版」である。この違いなどについては、LSE 付属図書館でマニスクリプトの保管者であった G. アレンの次の文章を参照されたい。G.Allen, "The Text of the Diary" in Archive Arrangement Routledge Associations compiled, *Index to the Diary of Beatrice Webb, 1873-1943*, Cambridge, 1978. なお、アレンの文章には頁数が付されていないことをお断りしたい。
- (5) フェビアン協会の初期の「正史」を書いた E. ピーズも、ウェッブ夫妻のすべての業績において「ウェッブ夫人とその夫の間に、明確な区別立てをおこなうことは不可能である」と述べていた。E.R.Pease, *The History of the Fabian Society*, London, 1916, 1925. p.212. なお、G. D. H. コールに典型的にみられたように、独身時代のビアトリスとシドニーの研究対象の違いを重視する研究もあるが、この見方に依拠すると、シドニーにも労働組合研究があったことを見落としてしまう懸念がある。Cf. G. D. H. Cole, "Beatrice Webb as an Economist" in M. Cole, ed., *op. cit.*, p.271.
- (6) Letter from S. Webb to M. Davidson, 12th December 1888. in N.Mackenzie ed., *The Letters of Sidney and Beatrice Webb*, vol. 1. Cambridge, 1978. p.119.
- (7) S & B. Webb, *Industrial Democracy*, London, 1897. p.173. 高野岩三郎監訳『産業民主制論』法政大学出版局、1990 年、202 頁。なお、以下で引用する邦語文献は、訳文を適宜、差し替えていることをあらかじめお断りしたい。
- (8) ビアトリスの「ロンドン調査」への関わり方、そこで、彼女が行った個別調査などについては、次の文献が有益である。R. O'day and D. Englander., *Mr Charles Booth's Inquiry*, London, 1993.
- (9) B. Webb, *My Apprenticeship*, Cambridge, 1926, 1979. pp.23-57.
- (10) *Ibid*, p.38.
- (11) *Ibid*, p.32.
- (12) COS に関しては、次の文献を参照されたい。J. Lewis, *The Voluntary Sector, the State and Social Work in Britain*, London, 1995. またビアトリスの COS 時代に関しては、従来、研究が手薄であったが、CBG (チャールズ・ブース・グループ) 研究の一環として、近年、次のような有益な文献が発表されている。Cf. R. O'Day, "How Families lived then: Katharine Buildings, East Smithfield, 1885-1890" in R. Finnegan & M. Drake eds., *From Family Tree to Family History*, Cambridge, 1994. pp.129-166.
- (13) この報告は、1992 年 11 月 7 日に、「コンベンショナル・ミニマム、モラル・ミニマム、ナショナル・ミニマム——『産業民主制論』の構造と論理——」(於、京都産業大学)と題して行われた。これはのちに、拙稿「コンベンショナル・ミニマム、モラル・ミニマム、ナショナル・ミニマム——『産業民主制論』の形成——」『佛教大学総合研究所紀要』第 2 号、1995 年 3 月、78 - 106 頁、として公表した。また、拙稿「B. ウェッブの「ユダヤ人社会」を読む——コンベンショナル・ミニマムの一源流——」『佛教大学報』第 43 号、1993 年 9 月、12 - 15 頁、も参照されたい。
- (14) B. Potter, "A Lady's View of the Unemployed at the East" *Pall Mall Gazette*, Feb. 18. 1886. p.11.

- (15) *Ibid.* p.11.
- (16) Letter from B. Potter to J. Chamberlain, [early March 1886] in N. Mackenzie ed., *op. cit.*, pp.53-54.
- (17) *Ibid.* p.53.
- (18) 前掲, 拙稿「コンベンショナル・ミニマム, モラル・ミニマム, ナショナル・ミニマム」82-88 頁, 参照。
- (19) N.Mackenzie,*op.cit.*p.54.
- (20) R. ハリソンのウェッブ夫妻に関する伝記研究は画期的な面を有しており, かれらが「帝国主義」,「アイルランド自治問題」,「女性参政権問題」,「救貧法」に関して, 必ずしも見解が一致していたわけではなかった, と指摘していた。しかしながら, ウェッブ夫妻の労働組合主義研究に関しては, 「ウェッブ神話」にとらわれていたといえよう。R. Harrison., *The Life and Times of Sidney and Beatrice Webb, 1858-1905: The Formative Years*, London, 2000. 大前眞訳『ウェッブ夫妻の生涯と時代』ミネルヴァ書房, 2005 年。拙評「ロイドン・ハリソン（大前眞訳）『ウェッブ夫妻の生涯と時代』」『社会経済史学』vol.71.no.4,2005 年 11 月, 117-119 頁, 参照。『産業民主主義』の「寄生産業」については, のちにあらためて取り上げるが, ひとまず, 以下を参照されたい。S & B. Webb, *op. cit.*, pp.749-766. 前掲, 邦訳書, 914-937 頁。
- (21) N. and J. Makenzie eds., vol. 1. *op. cit.* p.164.
- (22) B. Webb, *My Apprenticeship*, London. pp.437-446. すぐのちにみるように, ビアトリスは両論文を, 『わたしの徒弟時代』の付録に載せると述べていたが, それがまったく原稿と同一のものであるかは明確ではない。わたしは両論文の原稿をともにみてはいないが, 「カール・マルクスの経済理論」は, R. ハリソンの評価に従って, 同著に付録として所収されている「経済科学の本質」(On the Nature of Economic Science) と同じものとみなして, 論をすすめることにする。R. Harrison., *op. cit.* p.363. 前掲, 邦訳書, 注 31 頁。
- (23) B. Webb, *My Apprenticeship*, Cambridge, *op. cit.* p.292.
- (24) *Ibid.* p.292.
- (25) *Ibid.* pp.292-293.
- (26) B. Potter, "On the Nature of Economic Science" in B. Webb, *My Apprenticeship*, London, *op. cit.*, pp.439-440.
- (27) B. Webb, *My Apprenticeship*, Cambridge, *op. cit.* ,pp.292-293.
- (28) *Ibid.* p.293.
- (29) *Ibid.* p.293.
- (30) *Ibid.* p.294.
- (31) *Ibid.* p.293.
- (32) *Ibid.* p.294.
- (33) B. Potter, "On the Nature of Economic Science" *op. cit.* p.444.
- (34) 江里口拓『福祉国家の効率と制御』昭和堂, 2008 年, 38-55 頁。この著作の第 2 章で, 江里口は, スペンサーやマーシャルとの比較でビアトリス（ウェッブ夫妻?）の方法を論じようとしているが, マルクスをまったく無視している。なお, ウェッブ夫妻の労働組合主義研究に関して, 江里口の使う「ウェッブ」という呼称は, 概して, ビアトリスのみの理論的貢献を意識しているにすぎず, シドニーが果たした理論的貢献にはまったく関心を払っていないといえよう。ウェッブ夫妻の労働組合主義研究におけるシドニーの果たした役割に関しては, さしあたり, 次の拙稿を参照されたい。拙稿「コレクティブ・ルールからコモン・ルールへ——シドニー・ウェッブの労働組合論の発展——」『大原社会問題研究所雑誌』490 号, 1999 年 9 月, 1-22 頁。拙稿「ウェッブ夫妻の「産業民主主義」概念の形成」『佛教大学社会学部論集』60 号, 2015 年 3 月, 19-40 頁。
- (35) H. Spencer, *Social Statics*, London, 1851, 1996. in M. Talor ed. Herbert Spencer: *Collected Writings*,

Vol. 111. 本稿はスペンサーの学問および学問体系に関して、独自の評価や批判をおこなう用意がない。さしあたり、次の近年の邦語文献を参照されたい。挾本佳代『社会システム論と自然』法政大学出版局、2000 年。また、スペンサーが明治期の日本の政治や学問に与えた影響に関しては、次の文献を参照されたい。山下重一『スペンサーと日本近代』御茶の水書房、1983 年。近年のスペンサーを含んだヴィクトリア期の進化論およびそれに関する科学史研究については、次の文献を参照されたい。E. Beasley, *The Victorian Reinvention of Race*, New York, 2010. J. Conlin, *Evolution and the Victorians*, London, 2014.

- (36) H. Spencer, *Social Statics*, *op. cit.*, pp.75-76
- (37) B. Potter, "On the Nature of Economic Science" *op. cit.*, pp.437-438.
- (38) R. O'day and D. Englander. *op. cit.*, pp.132-155.
- (39) B. Potter, *The Co-operative Movement in Great Britain*, London, 1891. p.195. 久留間鯨造訳『消費組合発達史論』同人社出版、1925 年、268 頁。
- (40) 前掲、拙稿「コンベンショナル・ミニマム、モラル・ミニマム、ナショナル・ミニマム」88-104 頁、参照。
- (41) 前掲、拙稿「B. ウェブの「ユダヤ人社会」を読む」12-15 頁、を参照されたい。
- (42) B. Potter, *The Co-operative Movement in Great Britain*, *op. cit.*, p.16. 前掲、邦訳書、22 頁。
- (43) *Ibid.* pp.47-48. 前掲、邦訳書、65-66 頁。
- (44) *Ibid.* p.47. 前掲、邦訳書、65 頁。
- (45) *Ibid.* p.48. 前掲、邦訳書、67 頁。
- (46) *Ibid.* p.49. 前掲、邦訳書、68 頁。
- (47) *Ibid.* pp.18-19. 前掲、邦訳書、26 頁。ここで簡単に、スペンサーの「機能的適応」の含意をたしかめておこう。かれは『生物学原理』の第 8 章「有機的進化はいかに、引き起こされるのか？」で、有機的進化の原因に関する簡単なサーベールを行った。そして、ダーウィンとラマルクを一定程度、等しく評価していた。「ダーウィン博士によれば、外部的な条件の変化が、有機体の修正の原因であると挙げられている。…ラマルクもおなじ見方を詳細に述べている。…一見したところでは、かれは、あたらしい条件に対する直接的な適応を、進化の主要な原因としてみていると思われる」と。しかし、スペンサーはかれらが述べた進化の原因は「真の原因ではなく、もっとも近い原因である」と限定的に評価していた。「条件に対する機能的適応が一般的には、進化をもたらすか、あるいは、進化の不規則性をもたらすと言えば、さらなる疑問を生むだろう。条件に対して機能的適応は、なぜ存在するのか？用不用は、なぜ、構造において適切な変化をもたらすのか？」このように、スペンサーは、ダーウィンおよびラマルクの進化論を「機能的適応」と呼び一定程度評価しつつ、その「機能的適応」はなぜ生じるのかと疑問を呈していたといえる。H. Spencer, *The Principles of Biology* Vol. 1. *The Works of Herbert Spencer* Vol. 1, Osnabrück, 1966, pp.490-498. スペンサーの学問およびその周辺に関する近年の研究に関しては、前注記 (35) を参照されたい。
- (48) B. Potter, *The Cooperative Movement in Great Britain*, *op.cit.*, p.19. 前掲、邦訳書、27 頁。
- (49) *Ibid.* p.19. 前掲、邦訳書、27 頁。
- (50) *Ibid.* p.19. 前掲、邦訳書、27 頁。
- (51) *Ibid.* p.240. 前掲、邦訳書、328 頁。
- (52) やや古いが、日本の社会政策論との関連で、『民主主義』およびウェッブ夫妻のナショナル・ミニマム概念に焦点を当てた大前の研究は、同著の「労働組合主義の経済的特質」章にとくに関心を示していた。大前朝郎『社会保障とナショナルミニマム』ミネルヴァ書房、1975 年。
- (53) S & B. Webb, *op. cit.*, pp.703-704. 前掲、邦訳書、858 頁。
- (54) *Ibid.* p.719. 前掲、邦訳書、877 頁。
- (55) *Ibid.* p.720. 前掲、邦訳書、879 頁。

- (56) *Ibid.*, pp.733~4. 前掲, 邦訳書, 895-896 頁。
- (57) *Ibid.*, p.752. 前掲, 邦訳書, 917-918 頁。
- (58) *Ibid.*, p.704. 前掲, 邦訳書, 858 頁。
- (59) ウェッブ夫妻が労働組合主義を研究した 19 世紀末イギリスでは, 労働組合は「社会進歩」に抵抗する古い組織であるとする見方が大勢を占めていた。それに対して, 独身時代からおこなってきた理論研究および調査によって, ビアトリスはそれが誤った理解であるということを『民主主義』において実証してみせようとしたといえる。ここに, 『民主主義』の理論ならびに主要な結論に, 独身時代のビアトリスのキーワードがつよく影響を与えていたひとつの背景を指摘できよう。より広い背景については, 以下の文献を参照されたい。Cf. A. L. Levine, *Industrial Retardation in Britain, 1880-1914*, Hampshire, 1967, 1993. pp.79-93.
- (60) H.Spencer, "Progress: its Law and Cause" in Spencer, *Essays: Scientific, Political, & Speculative. The Works of Herbert Spencer*, Vol. XI, *op. cit.* p.9. 清水幾太郎責任編集『世界の名著 36 コント スペンサー』中央公論社, 1970 年, 399 頁。
- (61) D. E. Nord, *The Apprenticeship of Beatrice Webb*, Amherst, 1985. p.192

（ふじい とおる 公共政策学科）

2015 年 10 月 28 日受理